

デュピクセント皮下注について

(特徴)

- IL-4とIL-13を抑制し、既存治療で効果不十分のアトピー性皮膚炎・気管支喘息・鼻茸を伴う慢性副鼻腔炎の治療に使用されます。
- 本製剤は自己注射可能な製剤です。

《アトピー性皮膚炎》

(薬理作用)

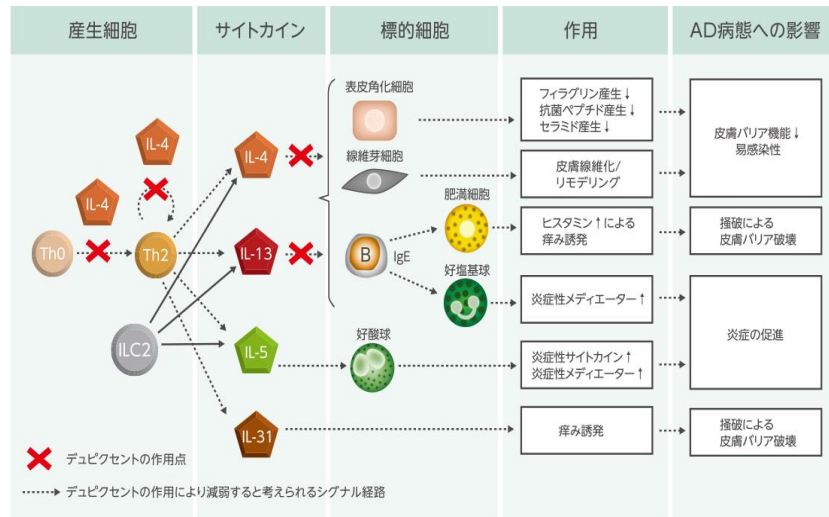
- IL-4/13によるシグナル伝達を阻害し、アトピー性皮膚炎の病態に深く関与するTh2型炎症反応を抑えます。

(用法用量)

成人には、初回600mg皮下投与し、その後は1回300mgを2週間隔で皮下投与

* 通常16週までに効果が得られるため、16週超えても効果がない場合は投与中止を検討する必要があります。

* 保湿外用剤の継続使用が必要です。
また、病変部位の状態に応じて抗炎症外用剤の併用が必要です。



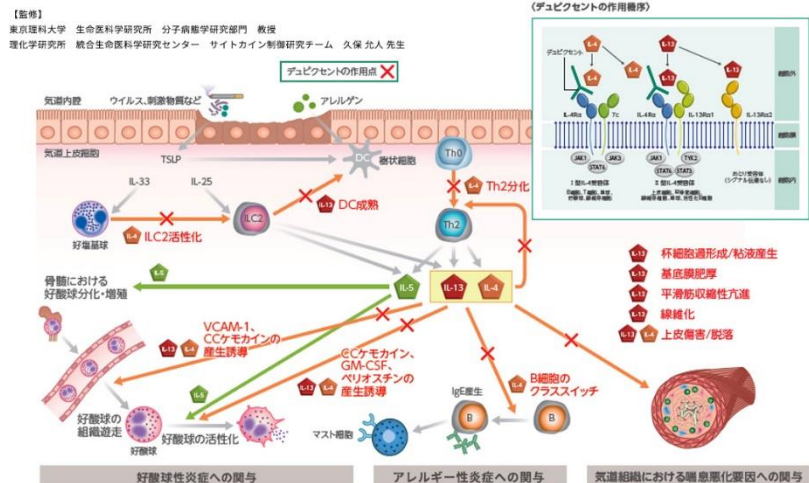
《気管支喘息》

(薬理作用)

IL-4/IL-13のシグナル伝達を阻害することで、Th0細胞からTh2細胞への分化・増殖、B細胞からIgE産生細胞へのクラススイッチ、好酸球の血管から気道組織への遊走、好酸球の活性化、気道上皮での杯細胞過形成及び粘液産生、平滑筋肥大などが抑制され、喘息発作の増悪抑制や呼吸機能の改善が得られます。

(用法用量)

成人・12歳以上の小児には初回600mgを皮下投与し、その後は1回300mgを2週間隔で皮下投与する。



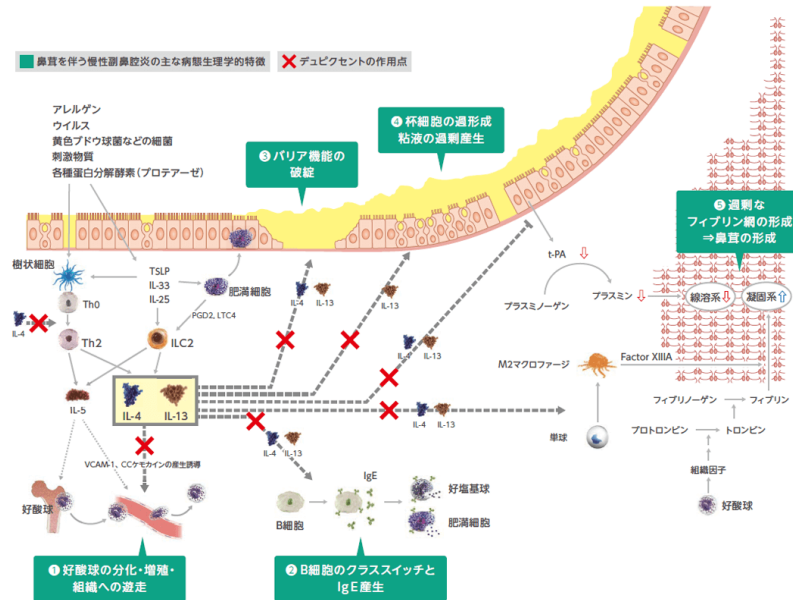
《鼻茸を伴う慢性副鼻腔炎》

(薬理作用)

・IL-4/13のシグナル伝達を阻害することで、鼻茸を伴う慢性副鼻腔炎の病態の主体であるType 2炎症反応を抑えます。

(用法用量)

成人には1回300mgを2週間隔で皮下投与
(症状安定後には、1回300mgを4週間隔で皮下投与できる。)



(自己注射における注意点)

- * 初回投与は、医療機関で医師もしくは医師の直接の監督の下で投与してください。
自己投与可能と判断された場合に自己注射へ切り替えることが可能となります。
- * 注射の45分以上前に冷所から取り出して平らな場所に置き、室温に戻してから使用してください。
- * 自己注射部位は、「へそ周り以外の腹部(へその周り5cmは避けてください)」もしくは「太もも」です。
→疼痛部やけが・打撲・傷跡は避けてください。また、アトピー性皮膚炎の患者さんについては、症状が重い部位は避けて注射してください。
→前回とは違う部位に注射してください。
- * 本製剤はシリンジタイプとペンタイプがあります。注射の方法が異なりますので、注意してください。
(当院はペンタイプのみ採用しています。)
- * 本製剤は、使い切りタイプの製剤です。使用後は医療廃棄物として廃棄する必要があります。

※その他、製剤に関する最新の情報は薬剤部へご確認ください。

参考文献

- ・デュピクセント皮下注 添付文書
- ・サノフィ株式会社 デュピクセント製品情報サイト
<https://www.dupixent.jp/atopy/>